

ふるさと人物伝2

# 香月泰男 19

## 氷中建設



エニセイ河  
夏は  
切り出された  
材木が  
ひっきりなしに  
流れてきて  
製材所のとこまで  
引き上げます

冬が近づくと  
板状の氷が流れてきて  
流木のまわりにも  
氷がつきはじめます

氷は岸からも  
張りはじめ  
水の流れは狭まり  
ある朝突然  
水の下に隠されて  
しまいます

氷の厚みは  
どんどん増していき  
やがて下を水が  
流れていることさえ  
確認できなくな  
ります

凍河の上を  
千トン重の  
大型トラックが  
無造作に  
行き交います

戦争……  
憎しみ……  
苦しみ……  
あらゆる人間の  
営みがあまりにも  
卑小に思えてくる

なぜ自然は  
いつも変わらず  
美しいのに  
人は変わり醜く  
ありつづけるのか  
……

自然の中で  
人間はなんと  
ちっぽけな  
存在なのだ  
ろう……

泰男は  
どう考えたとき  
ふと目を返して  
自分をとらえんと  
自分がここで  
こうして自己の  
卑小さをとらえて  
いること自体が  
一つの大きさを  
持っていることに  
気がかされます

私に  
はじめて自然も  
偉大で美しい  
ものとなること  
ができるのでは  
なからうか

どうだ  
私に  
自然の美しさも  
何もでもない

私にしか  
とらえられ  
ない  
美しさ  
がある

私には  
私だけの  
目があり  
それが私を  
絵描きにした